

- 1 遠く遠く眺めてをれば暮遅し
- 2 夜の雲の地を覆ひゆく余寒なり
- 3 卒業や壁は画鋏の跡ばかり
- 4 史学者の大きなルーペ春寒し
- 5 年上の女を愛す余寒かな
- 6 春雨や蜜沈みゆくヨーグルト
- 7 なにもかもわからぬままの余寒かな
- 8 記紀に載らぬ神を拝する花の里
- 9 階段昇る春灯を仰ぎつつ
- 10 声明（しようみょう）のいづれが亀の鳴く声か
- 11 空缶の空きたる分の春愁ふ
- 12 地下街の古き居酒屋啄木忌
- 13 何もかも他人が決める春の果
- 14 椿落つ昭和の名残断つやうに
- 15 夏近し廓の跡の先に海
- 16 虹消えて郵便配達夫のバイク
- 17 五月のとんかつからつと揚がりけり
- 18 或る人に嫌われてゐる聖五月
- 19 若葉風死もまた文学でありぬ
- 20 初夏や頬のこけたる小児科医
- 21 すれちがふベレーの婦人梅雨の街
- 22 白髪のなびくごとくに鮎の骨
- 23 ハンカチよりビーズこぼるるまたこぼるる
- 24 口紅はベージュと決めて夏休み
- 25 料亭の土産の鮎が冷めてゐる
- 26 胡散臭く「冷やし中華はじめました」
- 27 六角のグラスにそそぐ麦茶かな
- 28 冷麦のあとの単なる氷水
- 29 病室の鉄格子抜け南風
- 30 味噌薄き飲み放題の蜆汁
- 31 口下手な父の背中に夏の風
- 32 誕生日ケーキのメロンやや固く
- 33 ハンカチにおやつ包みて帰る子よ
- 34 ビール呑むまだちぐはぐの若夫婦
- 35 黒幕がバナナ啣へて立ち去りぬ
- 36 行水の子を抱く腕の黒光り
- 37 水着の子親ふりきりて飛び込みぬ
- 38 ハンカチ一枚アラビアのロレンス
- 39 平凡の凡が涼しき顔したる
- 40 日盛やチャーハンにつく紅生姜
- 41 劇場や炎暑の影の喪失譚
- 42 S極がS極嫌ふ極暑かな
- 43 キリン燃え溽暑を鳥が舞ふばかり
- 44 月も星も涼しい今日はパパの絵本
- 45 夏帯を解きていつもの腕に寝る
- 46 幸せの少しはみだす熱帯夜
- 47 片蔭や格子の奥に十王図
- 48 朝の酒昼の酒とて晩夏なり
- 49 夕焼に一点サン・テグジュペリの機
- 50 高く高く子の歯を投げる晩夏かな

- 75 秋水や湖畔に油絵の具の香
- 74 黄落に赤きピアノの玩具かな
- 73 握手しませう秋刀魚の特売日
- 72 盃に残る金箔良夜なり
- 71 秋の馬弱き者ならここに居る
- 70 月光痛々しわたくしは女豹
- 69 上弦の月の真下のタンゴかな
- 68 マネキンの乳房小さし草の花
- 67 鹿群れて塔の裏へと走り去る
- 66 梨ひとつピカソの前に置いてある
- 65 蜘蛛の囿に蜘蛛の屍水の秋
- 64 秋風やモンドリアンの白に黄に
- 63 網目より漏れたる星の流れゆく
- 62 知らぬ子に夫を貸しけり運動会
- 61 終戦忌あつけらかんのすつからかん
- 60 空に鉛筆突きさして残暑なり
- 59 秋めくやいつもきれいな霊柩車
- 58 母も子も眠りのなかの星祭
- 57 西鶴忌そろばん塾の灯は洩れて
- 56 東京に忘れてきたる残暑かな
- 55 終戦日遠くの声に急かされて
- 54 蝸にたちまち子らは影となる
- 53 浜松の松はゆたかに秋初め
- 52 百畳の一畳に寝る秋近し
- 51 夜の秋や古きノートに五賢帝
- 76 秋風にブリキ仕掛けのとんびかな
- 77 接吻のやうな檸檬の甘さなり
- 78 雲水の書は豪快にばつたんこ
- 79 どの家もよき秋灯の町である
- 80 燈火親し店の奥より桐の函
- 81 身に沁むや椅子に真白き布をかけ
- 82 和訳して何か足りなき暮の秋
- 83 秋深しチラシの裏の真ツ白な
- 84 仄暗き村には村の酉の市
- 85 冬帝はまだ乳呑み子の十一月
- 86 霜月や虚子も真砂女も文庫本
- 87 教え子の口紅甘き冬はじめ
- 88 霜降や味噌汁赤き奥三河
- 89 水門を目指す漣一葉忌
- 90 気遣ひの男ときどき冬ざるる
- 91 霜月や中島敦の虎がをり
- 92 外套の中で事件が起きてゐる
- 93 また一人喫煙所去る時雨かな
- 94 寒晴や人体模型男前
- 95 仕込み終え策いつぱいの海鼠かな
- 96 枯蔦に逃げ場失ふ蔵ひとつ
- 97 停車場は啄木ばかり寒波来る
- 98 外套よ何も言わずに逝くんぢやねえ
- 99 腕通す仕事始の着ぐるみに
- 100 元日のママン僕から洗つてよ